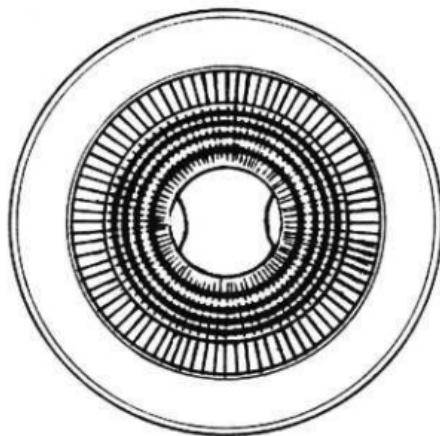


富田林市板持古墳群 調査概報



(第三号墳発掘重画放射線文鏡復原図)

1967

富田林市教育委員会

はしがき

富田林市板持、佐備にわたる金剛・葛城山塊縁辺の丘陵地帯には、板持前方後円墳を主墳として、6基の高塚墳墓が群在しており、それらは古式古墳として著名なものであった。

大登興産株式会社はこの古墳群の一部を含む約12万平方メートルの地盤を買収し住宅地として開発する計画をしたが、その内に含まれる古墳群8基の措置について、本市教育委員会に協議せられたところとなつた。

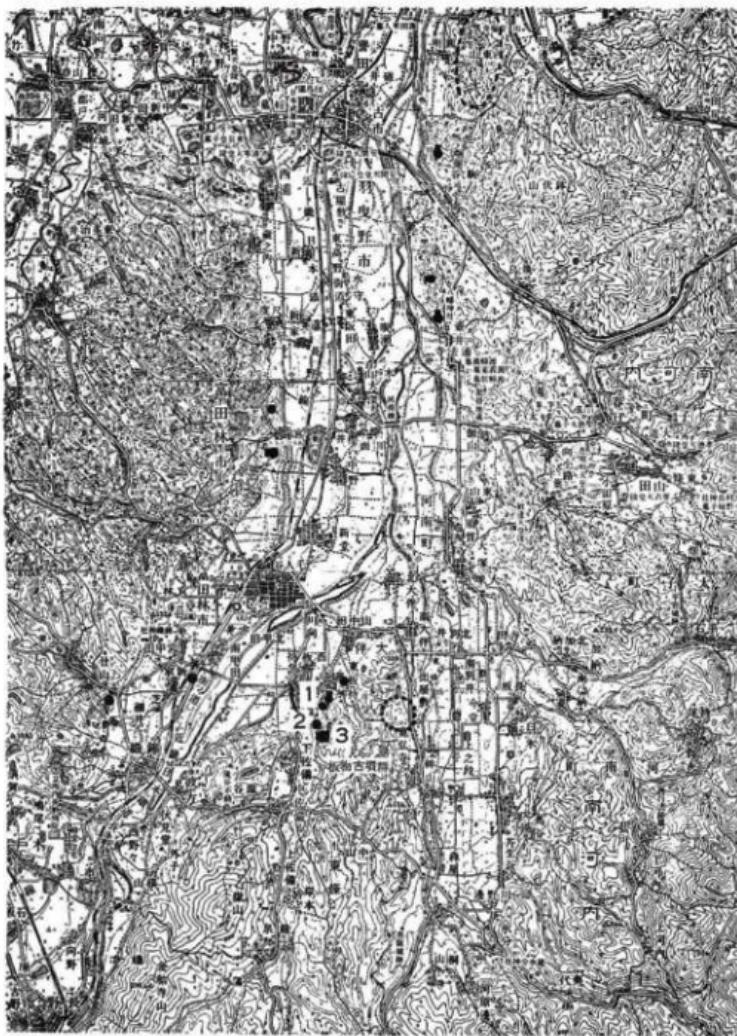
結果、大阪府教育委員会、文化財保護委員会とも協議の上、記録保存に万全を期することとなり、発掘調査を8月1日から約1カ月間行なうこととなつた。

発掘調査費用は全額、原因者が負担することとなつたが、このことについては同社社長、井手祐雄氏、ほか社員諸氏の配慮に候つところ多大であった。

調査は本市教育委員会の主催の下に、調査員として、神戸商船大学助教授、北野耕平氏と大阪府教育委員会の協力を得て、技師、堀江門也氏を迎え、加えて、大阪大学大学院生、近藤達士氏、そのほか富田林高校、河南高校、両考古学研究会等多数の協力を得た。

また遺物整理、概報作成等には、立命館大学学生、中村浩、中西晴人両氏の労をわざらわした。

富田林市教育委員会



第1図 板持古墳群の位置

I 古 墳 群 の 位 置

板持古墳群は、富田林市内板持と佐備の両地区に跨がっている。すなわち近畿日本鉄道南大阪線の富田林駅から南東方・石川・佐備川を横切って、由緒にして約2kmのところに、南北に細長く横たわる佐備丘陵の西縁北端、つまり、板持・佐備両部落の後方、平野に面した丘頂先端に立地し、前方後円墳の板持古墳を中心として、周方後方墳1、円墳4の合計6基が分布する。

そして、特に、葺石、埴輪を設け外形の整った前方後円墳の板持古墳や変形神獣鏡を出した板持丸山古墳寺、古式古墳群として、以前から、周知され、注意されてきた。

ところが、今回、大豊興産株式会社がこの地域を買収し、住宅地造成のため丘陵の上部をことごとく削平する計画が明らかとなったので、この工事に先立つて昭和42年8月1日より約1ヶ月間、発掘調査を行なうことになったのである。今回の住宅地造成計画内には佐備地区側が含まれ、調査の対象となったのは前方後方墳1、円墳2の合計8基である。

いま、更に詳しく地形をみると、金剛、葛城阿山脈の西麓からのびた佐備丘陵の一支脈西縁丁度、佐備川をはさんで駿山から北にのびた丘陵と対峙して、佐備郷をそのふところにだき、しかも、石川によって形成された豊かな平野部を眺望できる地を占めている。

附近には、当古墳群と対照するがごとくに、西約1kmに、周派、葺石、埴輪をもった彼方丸山古墳、さらに石川を渡って西方の羽曳野丘陵には、銅鏡の出土した廿山古墳、あるいは、発掘調査の行なわれた真名井古墳、銅鏡古墳、また佐備丘陵の東縁には帆立貝式のツギノキ山前方後円墳を中心とした寛弘寺古墳群、遠くは、石川谷の奥に著名な大師山古墳跡等があって、本古墳群と関連した遺跡として挙げられる。そして、遠く北方には、古市古墳群が望まれる。

II 調査の経過

8月1日、全員山頂にそろったところで調査開始。古墳は相当数の松が立ち並び、しかもその下はカシ木で被われていて伐採は困難を極めた。またそのため墳形等も伐採前には決めがたく、円墳、前方後方墳とはっきり判断できたのは伐採完了後のことであった。前方後方墳になるとは思ってもみなかっただけに、予想外の出来事だった。

しかし、以後調査は、天候にも恵まれ順調に進み、月半ばにして主体部を掘り当て鏡、剣、玉等、遺物も多数出土するところとなって最高潮に達した。そして、威儀器等の思いがけない発見もあって予定どおり1カ月で無事調査を終えることができた。

結果は、古墳墓8基の内一基は前方後方墳で後方部に木棺を直葬し、鏡、剣、鉄鎌、銅鏡等のほか多数出土。また1基は、円墳で、同じく木棺を直葬し、玉、鉄鎌、刀子、須恵器、土師器を出土した。しかし最後の一基は調査の結果古墳でないことが判明し、この古墳群は、その数5基となった。

なお、便宜上、北から順次1.2.3……号墳と仮称することとし、円墳は2号墳、前方後方墳は8号墳となり、1号墳（円墳・径1.5m）は今回の範囲外である。一応ことわっておく。

以下、1基ずつ詳しく述べることとする。

III 2号墳

〔墳丘〕

本墳は、南北にのびた丘陵の西端、開折され叉状になってのびた一尾根の中間、それが最も高く最もふくれた背部（3号墳）のところから少し下って、わずかに平野部に突出した景勝地に築造されたものである。

現状は、墳頂にはカシ木がおい茂り麓には松林、桜等の大木が林立した墳丘は、北側が崖あるいは山道として二段にもなって削りとられ、東側もまた小さな崖状になって墳丘がえぐりとられていたが、墳頂部は平坦で、主体部は完存しているものと思われた。

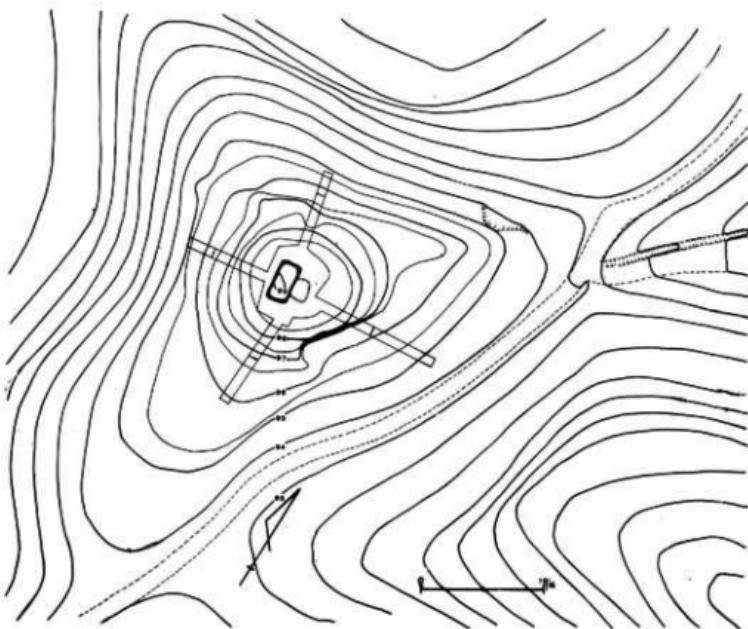
伐採後、墳丘実測図を作ったが、それによつてみると墳丘は海拔9.9mで、基底は9.6.5mを計り、高さ約2.5m、直径約1.5mの一般的な円墳であることが判明した。

ただ当墳を北、あるいは南の平野から見上げた場合、丘陵先端にあるため実際規模以上の効果が期待できたものと考えられる。

墳丘構造は、南北、東西、各トレンチ断面図によって考察できるが、盛土は大体0.5mで、地山は墳丘中央に行くにつれ高くなり、やはり、元來の地形を整形利用していることがうかがわれる。

墳丘基底部は断面をみても、明確に手を加えた形跡は認められなかったが、少々地山を削って傾斜を変えていることが認められた。

葺石、埴輪は全く認められず消失したとも考えられず、元來施設しなかったものと考えられる。



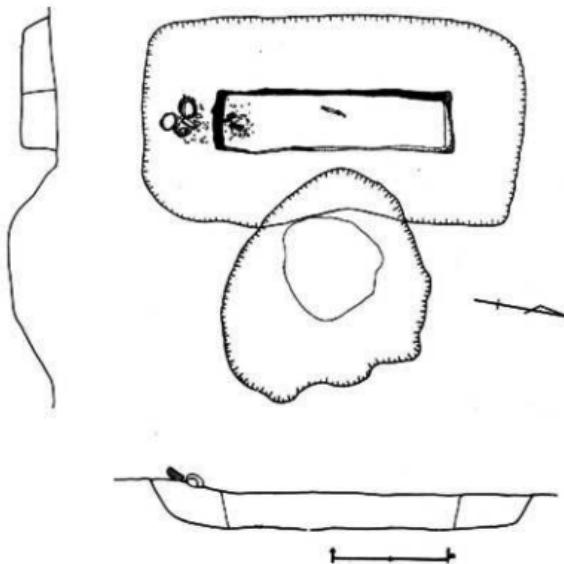
第2図 2号墳外形図

〔内 部 構 造〕

本墳の内部構造は、墳丘の中央部に営なされた土括墓であって、その長軸線は、ほぼ南北を指している。そして、他には埋葬施設と認められるものは何もなかった。

この土括墓は、内部に木棺を直葬したもので、木棺は箱形の組合せ式のものである。順序に従つて、もう少し詳しく構造を見ると、粘土質の地山を約0.8m掘り込んだ縱(南北)8.4m、横(東西)1.8mの隅丸長方形状の土括をつくり、その中央部に組合せ式箱形の木棺を安置したもので、木棺の大きさは、縱2m、横0.5m、深さ0.8mである。そして棺の周囲は、地山を掘り上げた土でもって埋戻し、棺を被ったものと考えられる。そして最後に、約0.5mの盛土とし埋葬を終えたものである。

排水施設等は認められなかった。



第8図 内 部 主 体 図

〔遺物の配列〕

本塙は盗掘を受けた形跡は認められたが、主体部から、わずかにはずれていたため、遺物の大部分は副葬された当初の状態で保存されていた。

これらの副葬品は、木棺内に収納されていたと解されるものと、木棺外に置かれていたものとからなっている。

まず、棺内に存したと推定し得る遺物としては、中央の部分に発見された刀子1本のみと考えられる。刀子の鉾は北を向けていた。

これに対して、棺外には、棺底、東側板に接して、鉄錐6本が、鉾を南に向来て束状に、そして、棺、南上端には、須恵器の杯身4個、蓋2個、土師器壇1個、土玉約400個が1括副葬されていた。特に、土玉は、埴土中以外に、杯身の中や、木棺の落ち込み土の中にも認められ、むしろ、その数のはうが多かった。副葬の仕方に特徴があるようである。

棺材は、全く朽失してしまっていた。

なお、埴土の中からも陶片、壺片、杯片等、多数の須恵器片が認められた。しかしながら、このことについては、盗掘者が土壤を少しずつて認められたこともあって擾乱によるものかもしれぬ。

〔遺 物〕

本塙の木棺の内外から検出された遺物を表示するとつきのとおりである。

○ 棺 内

1. 鉄刀子 1本

○ 棺 外

1. 鉄 錐 6本

2. 土 玉 約400個

3. 須恵器 杯身 4個

4. 土師器 壇 1個

つぎにこれらの遺物について、簡単な解説を加えておく。

鉄刀子、残存長、15cmのもので、巾2cm、厚さ0.5cmを計り、長さ5cmの茎の部分がある。茎には柄木の痕跡が認められる。

鉄錐——2種の形状があって、いずれも有茎式に属しているが、その中に逆刺を備えた

柳葉式と称すべきものは、2個ある。この鉄鎌は全長18.5cm、巾約8cmの大きさで茎の長さは8cmである。断面は鎌ではなく、両丸造りの薄手品で厚さ0.8cmである。

もう1種の鉄鎌は、鎌ともみられるものであるが反りが認められず、正確には棒状鉄製利器といっておくのが無難かもしだい。全長約14.5cmで巾約1cm、茎の長さは5cmで丸味をおびた茎には木質部が少々遺存している。断面は三角形状で厚さは0.5cmである。

土玉——約400個、少し焼いて濃ブルーに着色したものと思われ、1個1個、皆、その大きさ、形が異なっている。最大のものは径約1cm、最小のものは0.5cmで、穴は約0.1cmの径を計る。

須恵器、杯身・蓋——蓋2個、身4個が発見され、大体、全て大きさは、直径1.6cm、器高約5cmを計り、焼成良好で、底にはX印を箋描きしたものが多かった。いずれも同時期、同形式のもので、6C初頭のものである。

土師器、壺——高さ1.6cm、口径8cm、腹径1.5cmで球形の丸底に近い平底の器体に外反した短い口縁部をとりつけたものである。淡赤色の軟質の焼成である。

IV 8号墳

(墳丘)

当墳は南北にのびた丘陵の西縁、開削され、又状になってのびた一尾根の中間、その尾根が最も高く、最も巾をもった丘頂、海拔106mの景勝地に築造されたもので、丁度2号墳の南東方約100mの位置にある。

現状は、全般にカン木がおい茂り、加えて、墳頂部から斜面にかけて特に松等、大木でおおい隠され、墳形もまた相当に変形されていた。したがって伐採前には、とても前方後方墳であろうとは想像もできなかった。

伐採後、墳丘図を作りながら墳形を検討していくうちに前方後方墳と推測できるようになつたもので、特に、北側斜面等は松もなく、墳丘自体の残りもよくて、この推測に断を下すものであった。

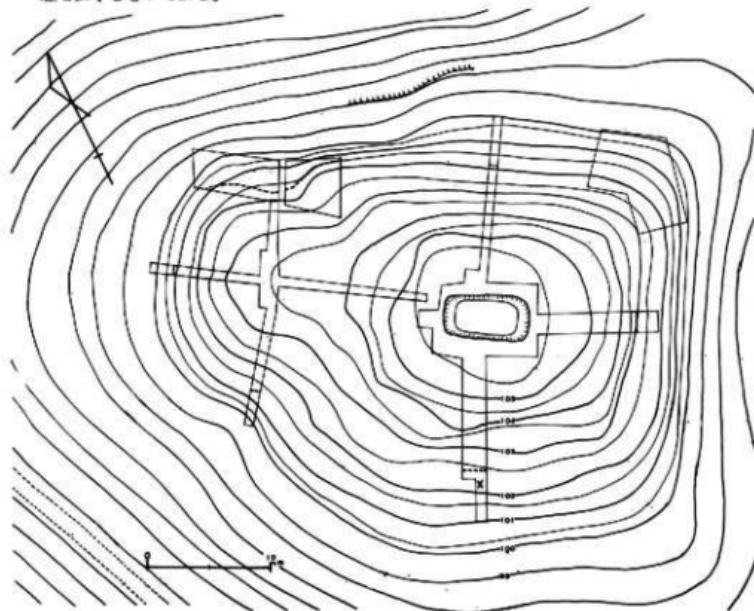
すなまち、前方部を北西に向いているこの前方後方墳は、下方に細く丘陵斜面との境界が判然としないので正確な規模を決定しがたいが、全長約40m、後方部の一辺は約25m、前方部の巾は1.5m、後方部の高さは4m、前方部の高さは2.5m程度であると考えられる。なお本墳は丘陵斜面を利用した傍係もあって墳丘は決して水平でなく後方部から前方部にかけて少く傾斜を保つことに注意を要する。したがって後方部と前方部との高さの差は約2mある。

本墳の形状は、トレンチ断面はもちろん実測図からでも明らかのように本来の丘陵の地形を著しく改変して整齊な墳丘を営んだと解し得るものではなく、墳丘の盛土は後方部の深さ0.5m位の上部だけに留まり、前方部はこれを平坦化するため削り取った土でもって整形したことがうかがわれる。また墳丘基底部は、埴輪、葺石等の施設はどこにも認められず、明瞭に境を指摘し得るものではなく、わずかに地山を削って傾斜を変えているだけのものであった。

同時に、後方墳の確認を踏査によっても判断すべく、右くびれ部と後方部北東隅を発掘した。結果は同様に余り明確なものではなかったが地山を追求した限り、隅は直角状を呈し、決して円にはならないことが確かめられる。

墳丘には施設は認められなかった。

なお、後方部南斜面中央基底と前方部右くびれ部基底から出土した一連の須恵器は、直接、本項に関係はないと思われるが、決して無視できないものであろう。特に後方部の藏骨器は注意を要するものである。



第4図、2号墳外形図(×印は藏骨器、出土地点)

(内 部 構 造)

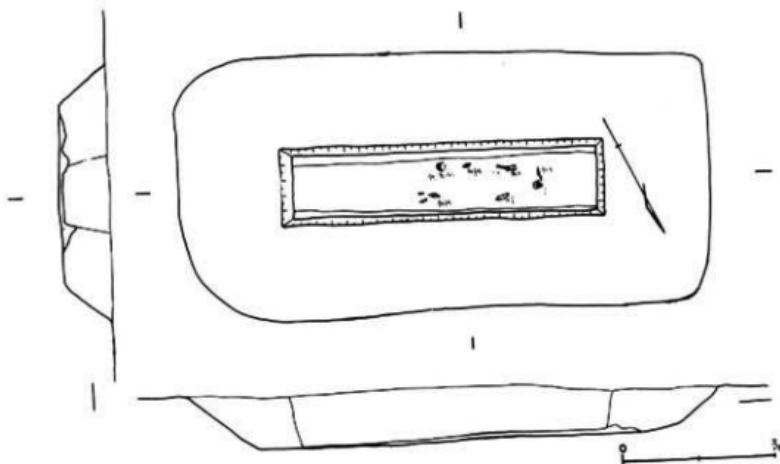
本墳の内部構造は、後方部の中心に營まれた土塼墓であって、その長軸の方向は墳丘の中心線とほぼ一致して東西の方向をさしている。そして後方部には土塼墓の他に内部施設は存せず、また前方部にも墓葬施設と認められるものは全くなかった。

この土塼墓は、内部に木棺を直葬したもので木棺材は全く朽失していたが、組合せ式箱形のものであった。

順序を追つてもう少し詳しく構造を見ると、まず砂質の地山を0.7m掘り込んだ縱(東西)7m、横(南北)8.8mの剛丸長方形状の土塼をつくり、その中央に良質の青白色粘土でもつて棺台をつくり木棺を安置したものと思われる。木棺の大きさは、縦4.5m、横0.8m、深さ0.7mという相当なものである。棺の周囲には意識的に粘土を多く混じた土を充満、さらに木棺の上にも粘土で被ったものと思われる。木棺跡の落ち込み下底床面に接して粘土が一面に10cmの厚さをもつて一様に認められた。そして、最後に約0.5mの盛土をして堆積を完了したものと考えられる。

盛土中からは、数点の土師胎巻片等が認められた。

他には排水施設等は認められなかった。これは砂質の地山とも関係あるものと考える。



第5図 内 部 主 体 図

(遺物の配列)

本塚は、全く盗掘を受けた形跡は認められず、遺物の配列は剖開された当初の状態のままであると思われる。しかし、遺物大部分の残存状態は悪く損耗しやすいものばかりだった。これらの副葬品は、棺内に収納されていたと解されるものがほとんどで、棺外といえは、ただ数点土塙墓掘方埴土中から検出された土師器壺細片のみであった。

棺内に存したと推定し得る遺物としては、棺の西端、小口板から 1m 内方の位置に重圓文鏡と鉄劍が置かれ、これを頭として、すぐ東の北脇に短劍、兩脇には鉄刀子・鉄鎌・鉄斧の一群が続き、さらにその東に鉄鏡の 1 群、ついで東に鉄鎌と鉄鏡を 1 捩した 2 群、最後には、再び鉄鏡の 3 群という遺物の配列であった。朱の遺存については、棺内全面にわたっていたが、やはり頭部の鏡の周囲が最も鮮明で、足元等は、ごく少量しか認められなかった。

棺材は、ほとんど朽失してしまっていたが、鏡と鉄鏡の部分にのみ細片ながら残存していて棺材の資料としても貴重であった。

鏡は、重圓文鏡で背面を上にし、鏡の穴は棺の中軸の方向と一致していた。また鏡の上 1.5 mm 離れて木棺小片が残つていて、その間に茶褐色の木質部を混入する土を包含し、朱を塗沫した漆膜状の薄片を含んでいたがその原形は明瞭でなかった。

鏡と交わった短劍は、三ヶ所破損していたが鋒を南に向かって直交して置かれていた。

続いて北脇の短劍は、鋒を西に向かって、かなり良好な残存状態であった。南脇の刀子は鋒を東に向かって破損した状態でつきの鉄鎌・鉄斧の 1 群も同様にはなはだしく鉄鎌等は気泡状に塊となつていて 1 本 1 本の形態、数量等、確かめられない状態であった。鉄斧は、刃部を東にして鉄鎌と共に 1 捩して置かれていたものと考えられる。

鉄鎌・鉄鏡の 1 群、これも腐蝕が著しく詳しいことはわからないが、鉄鎌の下に鉄鎌が置かれていたようで、鉄鎌はほとんど腐蝕変質して一塊となって多數の気泡を有する皮革の変質せるもののような態を呈する。数を推定するに鉄鎌・鉄鏡とも約 10 本ほどであろう。

2 群の鉄鎌は上記した各群と比較すると刃部を西にして 4.5 本検出された、残存状態もかなり良好であった。

結局、西方を頭として埋葬したものと考えられる。

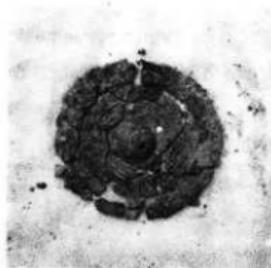
棺外遺物としては、先述した土師器壺細片のみで詳しい器形等は不明である。

(遺物)

本塚の木棺の内外から出土した遺物は次のとおりである。

○ 棚 内

- | | | |
|------|-------|-----|
| 1. 銅 | 鏡 | 一面 |
| 2. 鉄 | 製 灰 角 | 二口 |
| 3. 鉄 | 刀 子 | 一本 |
| 4. 鉄 | 斧 | 一口 |
| 5. 鉄 | 鎌 | 十数本 |
| 6. 銅 | 鏡 | 十数本 |



○ 棚 外

1. 土師器、埴片、数片

つぎにこれらの遺物について簡単な説明を加えておく

銅鏡——重圓文鏡と称すべきもので破損は、けなはだしい。質は分析の結果を見なければ明確でないが、青銅の質の余り良くない彷彿鏡とみられる。鏡の直径は8cmで鏡面は凸状で鏡背は平線、内区は一段下って範圍文帶がめぐりついで4本の重圓文がまわっている。鏡座は円筒でその軸通し孔は大きく、しかもいくらかその一方が大きい。

鉄製灰角——2口。いずれも全長20cm。刃部の長さは16cmで巾は8cm、厚さは刃部の中央で0.8cmである。

鉄刀子——1本。全長約17cm。刃部の長さ18cm、巾8cm、厚さ0.4cmを計る。目釘穴が母地に認められた。

鉄斧——1口。残存状態が良好でなく長さは明確でないが全長9cm、袋部の長さは約4cmを計り一般的な形のものであろう。

鉄鎌——10数本。残存良好なものから復原するにいずれも全長9.5cm、身部の長さ7cm、巾2.5cm、厚さ0.8cmで、断面は菱形を呈する。

鉄鏡——10数本。青銅鏡、全て柳葉形の身で、莖をもつ有茎鏡である。全長約4.5cmで、身部は2.5cm、巾1.5cmを計る。断面は菱形をなし鋸が走る。莖部に残存した矢柄は竹製である。矢柄の装着は竹に莖部を挿入したのも樹皮でまさ、その上に漆を塗ったものと思われる。

〔附、藏骨器〕

8号墳(前方後方墳)の後方部墳丘南斜面、中央基底部、表土下20cm、地山を直径20cmの円形に約10cmほど掘り込んで須恵質の甕が藏骨器として埋置されていた。

それは復原の結果、器高約24cm、胴最大巾24cmのもので口縁部を欠いて須恵器、高台附杯身

(口径15cm)でもって蓋していたことが確かめられた。胎内には焼骨細片が多く認められ一方掘方内には、炭が充満していた。

位置、出土状況等から考えて、古墳との関係もさることながら南方、丘陵下に眺められる佐倉跡との関係がより強く求められるのではないだろうか。



V 4 号 墓

8号墳よりさらに南東へ約800m入った丘陵頂にある。伐採後、墳形を検討し、また試掘溝を穿って発掘の結果、古墳として認められないことが判明したものである。

結局、8号墳が本群集墳の最南端に位置しているように考えられる。

VI 結 び

今回、調査を行なった2基は、ほとんど盗掘を受けていなかったため、最初想像していたよりも外形、内部構造等において種々の点を明らかにし得たばかりでなく、ほぼ完全に元の埋葬形態を復原することができた。

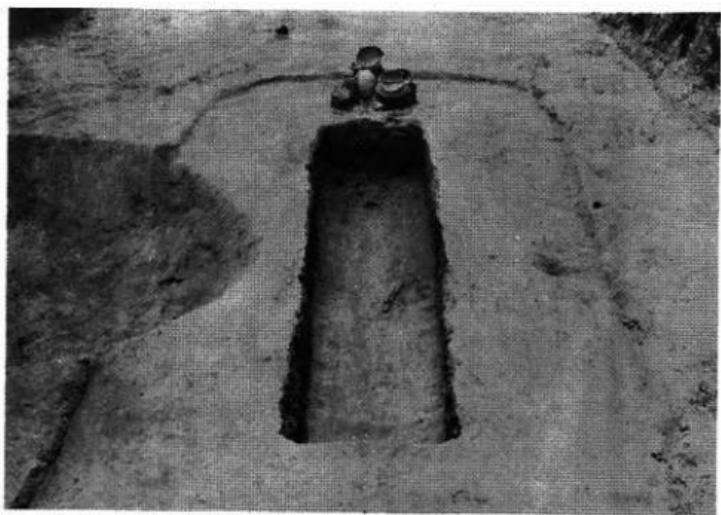
特に、外形に表われた墳丘の形状では、丘腰を利用した円墳と前方後方墳であり、内部構造はいずれも箱形結合せ式木棺を直接直葬した土坑墓であった。そしてその内に納められたほぼ元のままの副葬品の数々等、南河内における5C後半から6C初頭にかけての古墳として初めて明らかになるところが多かった。

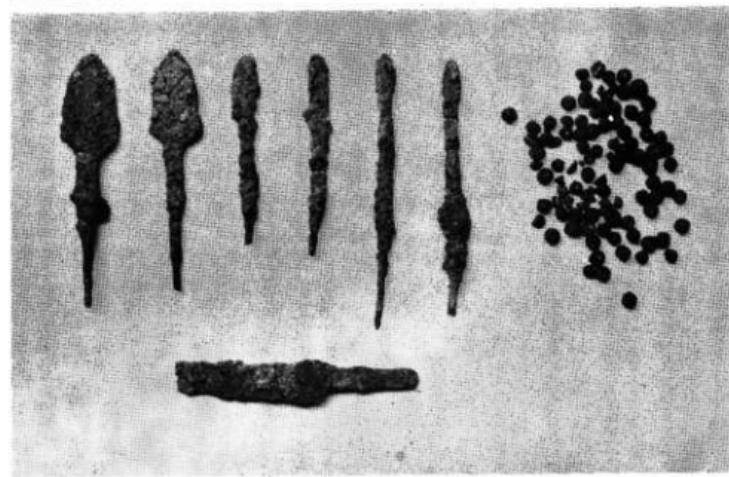
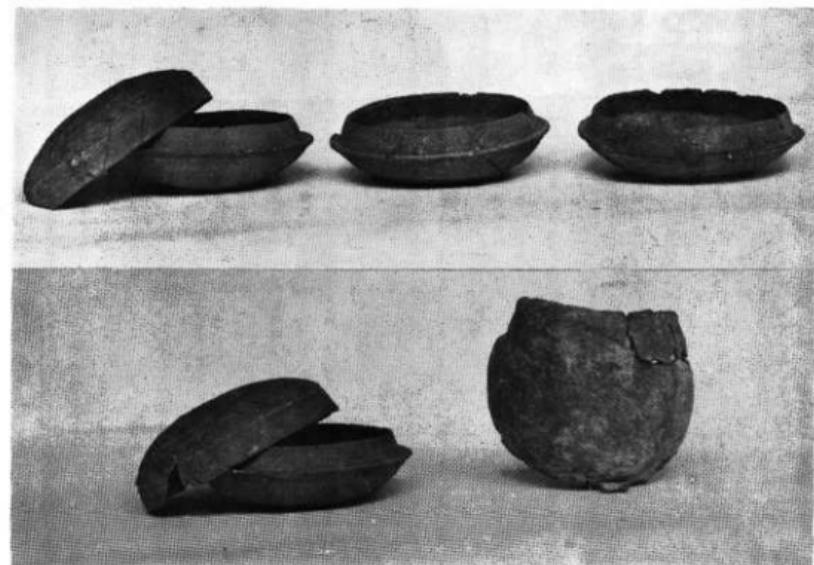
それに加えて、円墳と前方後方墳との両者の位置等から見た関係、さらには本郡集墳は、從来から埴輪、葺石を施設した前方後円墳の板持古墳、変形神獸鏡を出土した丸山古墳等で、よく知られていたが、より一層その性格を明確にできたことを喜びとする。

2号墳・外
形



2号墳・内
部主
体



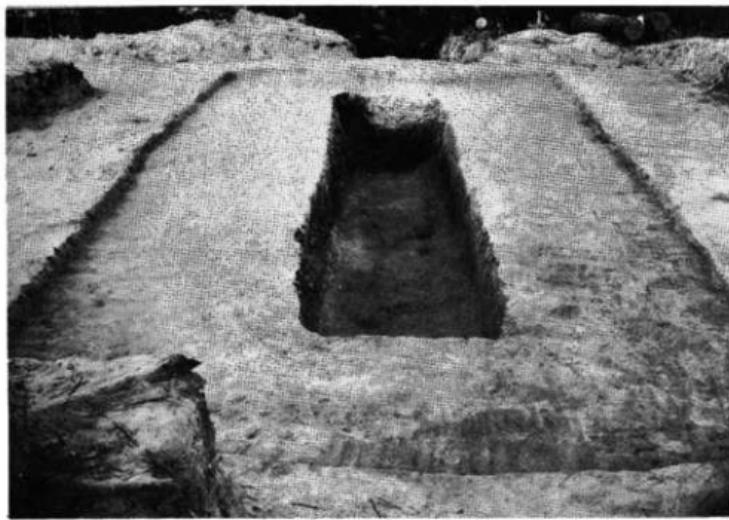


2号墳・出土遺物

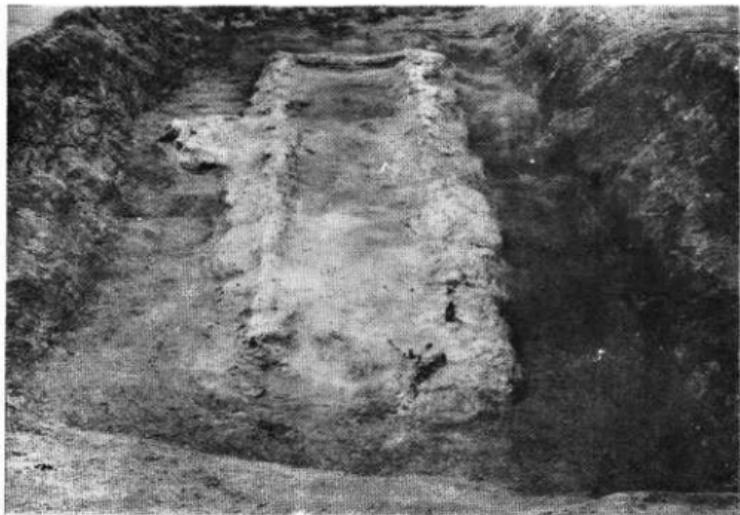
3号墳・外
形



8号墳・内部主体



8号墳・棺台



8号墳・出土遺物

